令和３年度第６回はだの生涯学習講座
令和３年１０月２３日（土）

近現代の報徳運動
～現代社会に与える影響～

足立洋一郎

主な内容

一　二宮尊徳の報徳思想とは

二　安居院庄七が指導した遠州の報徳とは

三　報徳運動の展開

四　遠州が生んだ起業家たち

五　現代に生きる報徳

一　二宮尊徳の報徳思想とは

①二宮尊徳（1787～1856）

・足柄上郡栢山村の生まれ
・20歳で没落した生家を再興
・小田原藩家老服部家の財政再建
・1822～37年　桜町仕法を実施
・北関東各地で難村復旧仕法を実施
・晩年、幕臣に登用、日光神領の仕法を実施

②報徳四綱領＝至誠、勤労、分度、推譲

・至誠　誠を尽くす心のありようが大事、尊徳は「心田開発」を説き、「善行者表彰」なども行った。

・勤労　不変の「天道」に対する「人道」、尊徳は勤労や節約、倹約を重視した。

・分度　分限を決め、守る。報徳に特徴的な考え方。

・推譲　互いに推譲することにより富が得られ子孫の富貴にもつながる。

③報徳訓

報徳訓

父母の根元は天地の令命にあり
身体の根元は父母の生育にあり
子孫の相続は夫婦の丹精にあり

父母の富貴は祖先の勤功にあり
我身の富貴は父母の積善にあり
子孫の富貴は自己の勤労にあり

身命の長養は衣食住の三にあり
衣食住の三は田畑山林にあり
田畑山林は人民の勤耕にあり

今年の衣食は昨年の産業にあり
来年の衣食は今年の艱難にあり
年々歳々報徳を忘るべからず

二　安居院庄七が指導した遠州の報徳とは

２　遠州への報徳の伝播

①遠州に報徳運動を伝えたのは安居院庄七、浅田勇次郎兄弟

・弘化4年（1847）、下石田村神谷与平治に伝える

・安居院庄七が遠州に来た理由一太々万人講の勧誘

・下石田報徳連中の結成、結社

②安居院庄七（義道）

・寛政元年（1789）、相模国大住郡蓑毛村密生院の浅田秀峰の二男として誕生、穀物商の安居院家に入婿した。

・米相場に失敗、借金だけのために桜町陣屋の尊徳を訪問、しかし面会できず風呂番などをしながら尊徳の教えを漏れ聞き、報徳に目覚め、自省して郷里に帰った。

・帰郷し穀物商として玄米をつき白米にして玄米の仕入れ原価で売った。残ったのは空俵、ぬか、小米だけの「元値商」（薄利多売）で家を再興した。
・家業再興後、再び家を出、弟浅田勇次郎とともに河内国の敬神家杉浦作兵衛を訪問、弟子入りし、杉浦の死後、神社に寄進するための講である万人講の勧誘のため各地を歩いた。神谷与平治を訪ねたのもそのためであった。
・庄七たちは、万人講とともに報徳と関西地方の進んだ農業技術を伝えた。

③安居院庄七が伝えた報徳の特徴

進んだ農業技術の紹介―「報徳作大益細伝記」

・正条植
・苗代の薄まき
・株まき
・客土・土肥など

２　報徳連中（社）の広がり

①徳報連中（社）の設立と報徳ネットワーク
・遠州各地の村に報徳連中（社）設立
・豪農が自村の難村状況を打開するために報徳連中（社）を設立
・報徳連中（社）の活動
　「勤行議定連印帳」の作成
　毎月1回の報徳常会の開催
　常会での報徳金積み立てや貸付
　常会での農事の話
　道造りなどの共同作業、など
・遠州各地に報徳社設立→報徳ネットワーク

②庄七と報徳七人衆の尊徳訪問

・嘉永6年（1853）、遠州報徳32か村代表7人、庄七と尊徳を訪問

・7人　内田啓助（影森村、室賀氏）

　岡田佐平治（倉真村、太田氏）

　中村常蔵（森町村、土屋氏）

　山中利助（同）

　竹田兵左衛門（気賀町、近藤氏）

　松井藤太夫（同）

　神谷久太郎（下石田村、服部氏）

・文久3年（1863）庄七、浜松宿で病没、75歳

３　岡田佐平治と福山滝助

①岡田佐平治（1812～1878）

・掛川藩地方御用達

・尊徳訪問後、掛川藩に「報徳」公認を求める。

・掛川藩や維新後の静岡藩で難村旧復仕法（行政式仕法）を実施

・佐平治の行政式仕法は報徳連中の延長上にあった。

②福山滝助（1817～1893）

・小田原の菓子商、小田原報徳社員、二宮尊徳に学ぶ。

・安居院庄七亡き後、報徳教師として慶応3年（1867)遠州に招聘

・岡田佐平治との面会は不調、西遠、三河を中心に報徳を指導

・滝助指導の報徳社9社で明治4年（1871）報徳遠譲社成立

三　報徳運動の展開

1　岡田良一郎と遠江国報徳社

①岡田良一郎（1839～1915）

・岡田佐平治の子息、二宮尊徳の晩年の門人、報徳四大人の1人

・浜松県民会・遠州州会議長として交換米取り消し運動を指導

・佐野・城東郡長、衆議院議員

・遠江国報徳社第2代社長

・掛川信用組合設立

・岡田良一郎の報徳思想

報徳三綱領(「立徳」「開智」「致富」)

貧富調和論

道徳と経済の調和論

②遠江国報徳社

・1875年(明治8)、遠州の報徳社を糾合して遠江国報徳社設立、安居院庄七在世中より開催されていた「遠江国報徳大参会」が発展したもの。初代社長岡田佐平治、2代良一郎

・報徳遠譲社も参加

２　報徳遠譲社と金井利太郎

・報徳社運動の主流は遠江国報徳社、遠譲社や報本社は非主流
「御上報徳」と「下方報徳」（金井利太郎）
・1879年（明治12）、尊徳門人富田高慶らが創設した興復社
を本社とすることを決し遠江国報徳社を離脱、分離した。
・遠譲社は報徳金の貸付を重視
・福山滝助の門人、金井利太郎（1848～1912）は、遠譲社改革
案として報徳金運用の活性化を模索

３　報徳報本社

・報徳七人衆の1人、新村里助を継いだ森町報徳社の社長新村里三郎は、1895年（明治28）遠江国報徳社を退社、同じく退社した同志の報徳社28社を糾合して遠江国報徳報本社を設立

・報徳金貸付に対する考え方の違いが原因

４　村落報徳社の展開

・報徳金の扱いに違いはあっても各村の報徳社の活動は基本的に同じ
・報徳社の事業―「貸付」「風教」「殖産興業」「水利土木」「教育」「救恤」「難村救済」など多様
・時期により事業の重点の置き方に変化
・明治初期　江戸時代から続く「難村救済」
・明治中期　「水利土木」や「殖産興業」（農事改良）
・明治後期～「公益法人」として活動
〇村落共同体の課題の変化に対応して事業の重点を変化させた。

５　掛川信用組合の設立

・1892年（明治25）遠江国報徳社社長岡田良一郎は、報徳の考えに基づく、日本最初の信用組合である掛川信用組合を設立、また、副社長伊藤七郎平らは報徳社員を組合員とする見付報徳社連合信用組合を設立

・信用組合法は1900年の産業組合法に含まれて成立、産業組合は現在の農業協同組合

６　報徳社大合同

・日露戦争後から大正初期にかけて報徳社数は急増し、報徳（社）運動は全国的な運動に
・大正期には停滞するが、昭和恐慌期にまた急増
・1924年（大正13）、遠譲社、報本社、駿河西報徳社、駿河東報徳社、静岡報徳社、三河国報徳社、小田原報徳社が大日本報徳社（遠江国報徳社）に合同

四　遠州が生んだ起業家たち

1　豊田佐吉（1867～1930）

・現湖西市の生まれ、父は大工
　自動織機の発明、実業家
・遠州地方は西三河に続く木綿
　の産地、綿糸や綿織物業がさ
　かん、織機発明の基盤
・「一、上下一致、至誠業務に
　服し産業報国の実を挙ぐべ
　し」（「豊田綱領」）
・労働・感謝・奉仕の精神

２　鈴木藤三郎（1855～1913）

・現周智郡森町の生まれ
・氷砂糖の製法を開発
・日本精製糖、台湾製糖設立、
「日本製糖業の父」
・衆議院議員
・報徳社に入社
・報徳文庫を今市に建設

３　鈴木道雄（1887～1982）

・現浜松市出身
・鈴木式織機、鈴木自動車工業設立
・2018年（平成30）スズキ会長鈴木修、「鈴木道雄財団」設立、社会福祉やスポーツ振興など

五　現代に生きる報徳

1　報徳林

〇榛村純一前大日本報徳社社長

・森林・林業に携わることが報徳の実践

・地球温暖化防止のための林業林政運動の促進

〇報徳社

・所有する報徳山への植林

２　掛川市学習都市宣言

- 掛川市民と掛川市は
  後代への責任を果たすために
  環境を守り行財政を計画的に運営し
  みんなで、風格ある人間、愛情ある家庭
  村格ある地域、都市格ある掛川市をめざし
  海と山と街道と報徳の掛川学をじっくり
  展開していこう
  そしてゆったりした豊かな生涯学習社会を
  構築していこう

３　労働者協同組合法

・労働者協同組合　組合員が出資し、それぞれの意見を反映して組合の事業が行われ、組合員自らが事業に従事する。

・議員立法で2020年（令和2）に成立、与野党の議員でつくられている「協同組合振興研究議員連盟」が原動力

４　現代に生きる報徳

・現代の報徳をどう考えるかは、尊徳門人の報徳理解がそれぞれであったように、とても難しくまだ共通した理解はないように思います。あえていうなら「公共」「協同」「調和」とでもいえるかもしれません。

・尊徳が農民の暮らしを考えたように、報徳社の歴史は共同体の構成員の生活や生業を守るために主体的に活動した歴史でした。いま新たなコミュニティが生まれています。そこに集う人びとがよりよく生活できるために能動的、主体的に活動していくことが、現代の報徳のひとつの形かもしれません。